

留学生ら製造業学ぶ

京丹後のメーカーでものづくり見学



留学生たちに自社製品について説明する
廣瀬社長（左） 京丹後市大宮町善土寺・
ヒロセ工業

京都情報大学院大学（京都市左京区）や京都コンピュータ学院（同市南区）で学ぶアジアなどの留学生が、日本での就職を視野に丹後の製造業のものづくりを学ぶため、精密部品加工メーカーのヒロセ工業（京丹後市大宮町）を訪問した。工場見学などを通じ、経営者と意見交換した。

日本での就職に興味

経営者と意見交換



廣瀬社長の説明に聞き入る留学生たち



府内の民間企業などでつくる共同事業体「丹後多彩化ワークス」による、外国人の定住者と事業者の受け入れ効果を検証するプログラムの一環。府北部の人材不足を補うのが目的。地元製造業を後押しする府の「共創型ものづくり等支援事業」の補助対象となっている。

9月初旬から来年1月下旬にかけて、府内の留学生らが丹後地域の機械金属事業所を訪問するほか、留学生へのアンケートやヒアリング調査などが進められる。

同社へは、中国とモンゴル、インド、コスタリカの4カ国の男女12人が9月10日に訪れた。無人で稼働する精密部品加工の工場、多様な業種の事業者ともものづくりに取り組む

開発展示棟「EN LABO（縁ラボ）」を見学した。

留学生から将来の夢を問われた廣瀬正貴社長（53）は「高品質のものづくりを進め、海外進出を見据えた世界に通用する会社に育てること」と答えた。その上で、工場は無人に近い形で稼働する行程もあるが、製品の仕上がりは人の目で確認していると強調。「低コストの生産体制も大事だが、ニーズに合わせて1個からの製品を生み出せるのも強み」と説明した。

同社への就職に興味を持った留学生から入社に向けたアドバイスを求められ、廣瀬社長は「ものづくりが好きな人は大歓迎。履歴書を見るだけでなく、必ず面接を受けてもらおう」と述べた。インド出身の女性（25）は「社長と話し、丹後の会社と土地柄に縁を感じた」と話していた。（山本秀一）